

杜子春

映画文学人生論

芥川龍之介 (1892-1927)

| | | |
|--------|--------|-------|
| 『杜子春』 | (1920) | 「赤い鳥」 |
| 『羅生門』 | (1915) | 「新思潮」 |
| 『鼻』 | (1916) | 「新思潮」 |
| 『蜘蛛の糸』 | (1918) | 「赤い鳥」 |

唐の都洛陽の西の門の下に、ぼんやり空を仰いでいる、一人の若者がありました

『杜子春』の名前を私が知ったのは、中学校の教科書である。

ある春の日暮です。

唐の都洛陽（らくよう）の西の門の下に、ぼんやり空を仰いでいる、一人の若者がいました。

この若者が杜子春（とししゅん）。金持の息子だったが、財産をつかい尽して、その日の暮らしにも困っている。そこへ老人があらわれて、黄金が埋まっている場所を教えてください。

杜子春は、その黄金のおかげで大金持になり、誰からもちやほやされるが、やがて黄金をつかい尽くし、また、その日暮らしになる。

老人があらわれ、再び大金持にしてくれたが、結果は同じだ。お金はもういらぬ。人間というものに愛想がつかない。大金持のときはちやほやしてくれるが、いったん貧乏になると、やさしい顔もみせない。それよりも、老人の弟子になって、占術の修行をしたいと、杜子春は老人に頼んだ。

老人の弟子になった杜子春は、老人が留守をしている間、何があっても決して声を出さず、一言でも口をきいたら仙人にはなれないと言われた。

その通り、口をきかないでいたら、最後に閻魔大王の前に引きすえられた。そして、畜生道に落ち



杜子春

映画文学人生論

ている父母が鞭で打ちのめされるのを見て、思わず、「お母さん」と、叫んでしまった。

そのために、仙人にはなれなかったが、それからは、人間らしい、正直な暮らしをするつもりになったという話である。

老人になった今、この小説を読み直すと、自分の一生も杜子春と似たようなものだったという感慨にさそわれる。大金持になったことはないが、バブル経済とその崩壊の空しさはそれなりに経験している。けっきょく、人間らしい、正直な暮らしをするのがいちばん幸せだと子どもや孫に言い聞かせてやりたいと思う。

しかし、人間らしい、正直な暮らしをしたいたいと思っても、生存競争がはげしい世の中ではそれも実際には難しい。芥川龍之介の作品で教科書に採用されている『羅生門』の下人は、主人から暇を出され、餓死するか、盗人になるより外に仕方がないという状況に追い込まれた。

盗人になることを選んだ下人は、『蜘蛛の糸』の陀多（かんだた）のように地獄に落ちなければならぬ。そこへ銀色の蜘蛛の糸が、一すじ垂れてきた。その糸にすがりつき、よじのぼれば地獄から抜け出せそうだったが、「こら、罪人ども、この蜘蛛の糸はおれのものだぞ」と、言ったとたん、糸はぷつんと切れてしまった。

この頃や戯作三昧花曇り

芥川龍之介